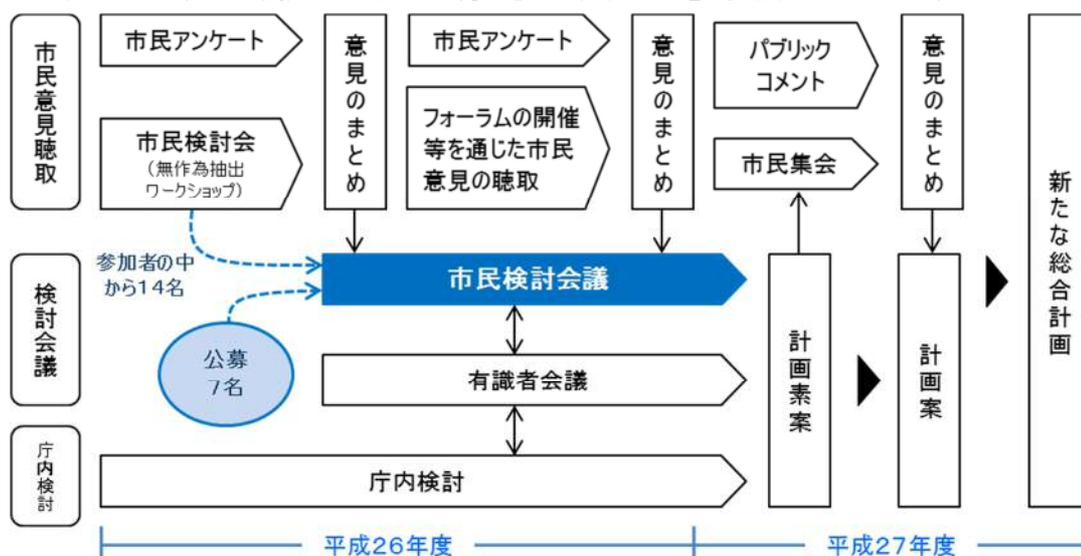


川崎市総合計画市民検討会議 第5回全体会 開催結果

日時:平成 27 年 7 月 12 日(日)9:30~12:15
会場:川崎市役所 第3庁舎 15階会議室

1. 「川崎市総合計画市民検討会議」について

- これからの川崎の目指すべき方向性や取組を明らかにする「新たな総合計画」の策定にあたり、市民の視点での意見や助言をいただく場として、「川崎市総合計画市民検討会議」を開催してまいりました。
- 「市民検討会議」では、部会による議論を行うほか、全体会で意識の共有化や意見の集約を図るとともに、別途設置する「川崎市総合計画有識者会議」と検討内容を共有化し、市民の視点から新たな総合計画素案への意見提案をしました。



2. スケジュール

平成 26 年 10 月 4 日 (開催済)	第 1 回全体会
11 月 1 日 (開催済)	第 1 部会 (社会福祉 (介護、健康))
12 月 21 日 (開催済)	第 2 部会 (子育て、教育)
平成 27 年 1 月 25 日 (開催済)	第 2 回全体会 (第 1、第 2 部会の共有、防災・コミュニティ)
2 月 8 日 (開催済)	第 3 部会 (暮らし、交通)
3 月 1 日 (開催済)	第 3 回全体会 (今後の会議の進め方、第 3 部会の共有、文化・スポーツ・都市イメージ)
4 月 25 日 (開催済)	第 4 回全体会 (「市民検討会議 意見のまとめ (案)」、有識者会議の検討状況、「みんなで取り組もう 私たちができること ~市民から市民へのメッセージ (案)」について)
7 月 12 日	第 5 回全体会 (第 5 回有識者会議、新たな総合計画素案策定資料について) ※最終回

3. 会議の構成

- 会議は次のとおり、市民21名とコーディネーター(学識経験者)1名の計22名で構成されています。(第5回全体会出席者：22名全員)

公募市民	7名
無作為抽出した市民による「川崎の未来を考える市民検討会」参加者	14名
コーディネーター(中央大学法学部教授・川崎市在住 磯崎初仁氏)	1名

※20代～70代の市民。各区概ね均等な人数で、男性11名・女性10名(コーディネーターを除く)

4. 第5回全体会の開催結果

(1) 市長あいさつ

- 市長からは、以下のような挨拶がありました。
 - 本日が最後の市民検討会議となるため、新たな総合計画素案策定資料について、忌憚のない意見をいただきたい。
 - 一昨日、最後の有識者会議があったが、各委員から、今回の総合計画の素案づくりは、当初から市民が参加し、「市民から市民へのメッセージ」が入っているなど、他に例を見ない、大変チャレンジングな取組であり、市民検討会議の市民委員に心から敬意を表したい、とのコメントをいただいた。
 - 行政としても未知への挑戦であり、はじめはどうなることかと思いながらも、1年かけて会議を繰り返してきた。そうして積み上げたものを、「市民から市民へのメッセージ」としてまとめ、一言一句まで言葉の大切さをみんなで共有できたことが感慨深い。皆さんとともに最後まで作り上げていきたい。
 - 総合計画は、具体的に何を行っていくのが重要であり、やらなければ絵に描いた餅になる。しっかりとやっていきたい。



福田市長からのあいさつ

(2) 「第5回有識者会議」について

- 「第5回有識者会議」について、事務局及びコーディネーターの磯崎教授より全体報告が行われた後、各部会の代表として有識者会議に参加した市民委員から「市民から市民へのメッセージ」などの報告の概要や感想について発表いただきました。

第1テーマ (社会福祉)

- ◇ 地域にコーディネーターがいなければ物事が進まない。行政によるきっかけづくりが必要である。また、顔の見える「互助」が非常に重要だと感じた。

第2テーマ (子育て・教育)

- ◇ ワーディング(言葉の使い方)の一つ一つに力を込めたことについて、有識者からご評価いただいた。とても有意義な時間であった。

第3テーマ (防災・コミュニティ)

- ◇ 有識者会議に実際に参加してみると、有識者委員が我々の意見を大切に



コーディネーターの
磯崎初仁中央大学教授

議論していただいていることがよくわかった。また、発表者以外にも、何人かの市民委員に傍聴に来ていただき心強かった。

第4テーマ（交通・暮らし）

- ◇ 交通と暮らしについては、公助の部分が大きいのが、個人が意識することで始まることもある。また、地域のコミュニティについて有識者と意見交換し、課題を共有できてよかった。

第5テーマ（文化・スポーツ・都市イメージ）

- ◇ このテーマについては、市民だけでは限界があり、公助による市の取組が重要との意見があった。川崎市の取組について興味を持てる機会になったので、今後は一人の市民としてシティプロモーションに貢献したい。



(3) 「新たな総合計画素案策定資料」について

- 「新たな総合計画素案策定資料」について、事務局より説明し、意見交換を行いました。主な意見としては、以下のようなものがありました。（→は市長、事務局からの回答）
 - 12月に予定されているパブリックコメントはどのようなものか。
 - 今後具体的な事業に関する検討・調整を進め、より詳細な内容を示したいと考えている。
 - 計画を立てた後の実行が重要であり、実行状況のフォローアップが必要では。
 - 成果指標を設定し、内部評価・外部評価を行う予定である。
 - 今回のパブリックコメントは具体的にどのように行うのか。今後、実施計画として具体化していくことについてはどうか。
 - 市のホームページのほか、区役所や市民館などで素案を縦覧するとともに、市政だよりの特別号を全戸配布し、郵送やFAX、ネットでもご意見をいただく。実施計画につながるご意見についても、パブリックコメントの中でいただきたい。
 - 市民の実感指標について、実感と合わないものがあるのではないか。
 - 数値と実感に差がある部分もあるかもしれないが、いずれにしても今回の総合計画では、こうした市民の生活実感をどう変えるのか、ということにこだわりをもっていきたい。



福田市長のコメント

- 市民の実感指標を計測する頻度はどうなるか。対象者の年齢を下げるべきとの意見もあったがどうか。
 - 指標の計測は2年に1回を考えている。対象者の年齢の引き下げについては、市の他のアンケート調査等と合わせて考えたい。
- 区民車座集会は30名程度で規模が小さい。市民車座集会は、もっと大規模に実施すべきではないか。
 - 会場は大きなホールを予定している。インターネットなども使いながら、多くの市民からご意見をいただきたい。
- まとめた市民の意見を具現化するに当たって、財源の問題はどう考えるのか。
 - 総合計画は行財政改革とセットで考えている。実施計画における個別事業を含めて、必要な財源を確保するための行財政改革の計画と合わせて策定していく。
- 自助・共助・公助というキーワードを使ってきたが、「互助」という言葉も使われている。どう整理するのか。
 - 地域包括ケアシステムで使われる概念であるが、「共助」は介護保険制度などのように、支える側と支えられる側が個々には結びついていない関係であり、それに対して、お互いの顔が見える地域での支え合いのような関係を「互助」とするものである。

(4) 意見交換

- 最後に、全体を振り返り、1. 総合計画素案策定資料についてのご意見、2. 今後作られる実施計画の策定・今後の市政運営についての意見や提案、3. 今回の市民検討会議に参加してのご感想、の3点について、各委員から一言ずつご発言をいただきました。主な意見としては、以下のようなものがありました。(→市長からの回答)

- 新聞を見て委員に応募して、有意義かつ幸せな時間を過ごさせていただいた。御礼申し上げます。



- 川崎は次世代の教育、最先端の技術もあり、北部に緑があって、南部に企業の集積があるなど地域ごとに特徴もある。南武線を活用したレジャー切符などで南北交流のきっかけをつくってはどうか。地域内でお金が循環することにもなる。
- 小中学生や高校生などの意見を聴くことも大切。こうした議論で区ごとにも行っていけるとよい。
 - この検討会議のメンバーは年齢的にも幅広く、バランスのよいご意見をいただきました。総合計画は10年スパンの計画であるが、職員が市民の中に入り込んで、

市民と一緒に作っていくことが重要だと若手職員にも言っている。これを繰り返し行っていくことで、市民の満足度も高まっていく。その姿勢をこれからも続けていきたい。南北の交流については常々思っており、お互いの魅力を知るような取組を進めていきたい。

- 災害について興味を持った。地震や台風を常に意識し備えるとともに、緊急時に情報がどのように伝えられるかが課題だと感じた。
 - 川崎市の「断トツ」をつくり出すためには、公助が大切であり、自分たちでできることをやることも重要。もっとコミュニティに自分が入り込んで、周りを巻き込んでいく必要があると感じている。情報発信については、伝わる、浸透する、ということが重要であり、ICTの活用などの工夫が必要。
 - 川崎市の中小企業は様々な問題を抱えており、迅速なサポートが求められている。こういう分野で現役を退いたシニア世代が必要とされ、喜んでもらえることは、達成感につながる。このような「心の豊かさ」を生み出すようなマッチングをスピーディーに行うことが重要。
- 暮らしや防災へのICTの活用については、「川崎アプリ」を開発中。中小企業のサポートについては、企業をリタイヤする人は貴重な人材、資源であると認識しており、活躍してもらいたい。

- 素晴らしい経験だった。実業界で30数年やってきたが、「市民一人ひとりが主役」という原点を気



づかせてもらった。「自分が川崎に何ができるのか」を問うことが重要。川崎市民であることにプライドを持てるようにしたい。そのために実業界の経験・知識を生かしたい。

- 意見の一つ一つを丁寧に記録してもらっているが、実施計画への反映が重要。参加して初めて共助・互助の大切さを実感した。実感すればやるので、参加機会を広げることが重要。民間との連携のチャンスも多いと思うが、スピードが大事。
 - 小学生の体力低下が課題だと思う。幼児期から運動・遊びをして体をつくることが重要であるが、遊ぶ場所がない、という声を聞く。子どもの心と体の発達を促すことで、健康寿命を延ばし、健康な川崎をつくり上げることが重要。
- 実業界の方からは、PDCAサイクルを回すことの重要性を指摘されることが多い。しっかりとチェックを入れ、サイクルを回していきたい。NPOなども含めた民間力の活用、企業との連携については、例えば体力づくりに関して、これまで直営の夏休み水泳指導を、民間のスイミングスクールに行ってもらおうこと

で、コストは 1/2、参加者は 2 倍になった。こうした資源をうまく生かしていきたい。

- 市には色々な立場があり、必ずしも合理的な判断ができなかったり、重複したりすることもあることがわかった。私自身、川



崎のために何ができるのか、ということについて思いを強くした。参加しないとシビックプライドは高まらない。今後の施策について、もっともっと参加して貢献していきたいと思っている。

- 我々の意見が取り入れられ、よくまとめられている。実際の取組に期待したい。参加して初めて川崎市のことがわかり愛着も生まれる。これからも市民との交流や対話の場をつくるのが新たなアイデアにつながる。高齢であっても元気な人のパワーは使わなければもったいない。
- 40 年近く川崎市に住んでいるが、改めてわかったことが多かった。総合計画をどのようにして市民の隅々まで伝えていくかが重要であり、市職員がプロモーター、コーディネーターとなることが必要。また、効率性や生産性も重要であり、もっと低いコストでやれる方法は色々ある。
- まちを知ること、参加することがシビックプライドにつながると感じている。そのためにも今までの「伝える広報」から、「伝わる広報」へと少しずつではあるが変えていっている。紙面構成や内容も変えている。こちら側から伝えたいことを単に言うのではなく、受け手側の視点になって伝えようという意識を強く持ちたい。いかに市民に伝わっていないかということを繰り返し認識した。
- 超高齢社会を見据えて、わかりやすい計画にすることが重要。市役所の職員だけでは難しくなりがちなので、市民の声を取り入れることはとても大切である。有識者会議の委員には、ぜひ川崎市在住の方を入れていただきたい。
- 「アイラブ川崎」という方がこんなに大勢集まって、熱い議論が行われた。ぜひ議会を通して、実現に向けて進めていただきたい。また、多くの市民に伝わるようにしたい。学校の副読本として授業で取り入れてもよいのでは。



- 地元で市民活動に参加しているのは専業主婦か高齢の方に偏りがちだが、ここは多様な人が参加している。これは無作為抽出の効果である。会を重ねるたびに皆さんが熱くなっていて、皆興味がないわけではなく、知らないだけなのだとわかった。また、これをたくさんの人に読んでもらうには、市のホームページがあまりにもそっけなく、市民にフレンドリーでない。もう少し工夫してもらえるとよいと思う。
- これからも市民の声を聞きながらいかに進めていくかが大きな課題。区民車座集会は2巡したが、30人の定員までいったのは2回くらいしかない。一番少なかったのは4人。今度の3巡目は、各区ばらばらのやり方をしてみようと考えている。7通りのやり方を工夫し、うまくいったものを次につなげていきたい。市のホームページについては、アクセス件数は非常に多く、何百万件のヒットがあるが、市民にフレンドリーでないという声を関係部局に返して改善したい。



- 参加してとても楽しかった。委員の情熱が伝わり、川崎市民のポテンシャルの高さを実感した。多世代が参加する地域コミュニティについて、少ない公助でよりアクティブな互助を生み出すことが重要。自分は学童ホールに関わっており、うまくコラボレーションができ、多世代交流の場になれるといいと考えている。
- 今後を大事に見守っていきたい。初めて参加し、「まちづくり」が身近なものに感じられた。この喜びをひとり占めするのではなく、子どもたちの世代につなげていきたい。地元の町内会では、回覧板の廃止、町内会長の輪番制など、地域の結びつきがドライになってきており、危機感を感じている。
- 総合計画は抽象的と感じたが、共助や互助としてみんなで行動しよう、というメッセージを発することは重要。ただし、地域コミュニティを実際にどうつくるのが難しい。市の職員が地域に入って行って、一緒につくるのは大事であり、それに市民が応えるのも大事である。呼びかけられれば、応える人は多いのではないか。そのためのチャンネルをつくるのが重要。



- せっかくまとめてきた動きを、次の世代にどうつなげるか、ということだと思う。これは地域包括ケアなど、あらゆる場面で出てきている。例えば、中学校の副読本を作って、子どものときから「互助とは何か」といったことを教え、コミュニティを支える素地をつくる必要がある。町内会長の引き受け手がいないという話もあった。地域によ

ってはかなり高齢化しているところもある。理念だけでは済まない課題もある。どうすれば多くの人を巻きこめるか、全力で研究しなければならない。多世代がどうつながっていくかが大切だと思う。

- 川崎市のよいところも課題もつかむことができた。この会議自体が多世代交流になった。市の会議は、興味はあったが敷居が高いと思っていた。今回運よく無作為で選出され参加することができてうれしかった。分野別の計画についても無作為抽出を広げていってもらえるとよいのではないか。
- 知識や経験が不足している私のような大学生でも、このような会議に出させていただいて、とても勉強になった。こういう経験を生かして、これからも市政に関わる機会をつくっていったらよいと思っている。まちづくりが面白いということを知らない人が多い。若い人が市政のことを知る機会をつくるとよい。
- もともとまちづくりに関心はなく、意見を言ってもどうにもならないと思っていた。しかし、市民の意見を細かなところまで聞いて、汲み取ってくれることがわかり、スケジュールを最優先で空けて参加するようになった。顔を合わせて議論することで情熱やエネルギーがよく伝わるのがわかった。このようなきっかけがあれば深く考える市民は多いのではないか。10年後、20年後の川崎をつくっていく若い世代を巻き込むには、学生や学校の代表とのシンポジウム、テーマ別の会議、世代別の会議などがあるとよいのでは。また、意見が反映されると、参加者はプライドをもって参加することができるので、スピーディーに反映することも重要だ。

- コーディネーターからもひとこと言いたい。今回よくまとめてくれたという反応が多かったが、「自ら守る」「伴走型」「リアル」「断トツ」「キラキラ感」などのキーワードが「市民語」から「行政語」になってしまい、言葉の魅力が失われているところもある。また、文章が丸まっけていて、焦点がぼやけてしまっている部分や、文章が長すぎる部分なども見られる。文章はできるだけ短く切って、わかりやすくし、焦点を明らかにしたい。



磯崎教授のコメント

- 無作為抽出は、初めての取組なので不安もあったが、とてもよかったと思う。課題によっては関心を持っている方から意見をいただく方がよい場合もあるので、バランスよく活用していきたい。

若者の意見をどういただくかについて、若者の視点からご意見をお聞きし、なるほどと受け止めた。実現をさせていきたい。子ども会の中に、ジュニアリーダーという仕組みがあり、大学生が小学生の世話をするというものもある。学校教育の中でやることも考えられる。色々なやり方を検討して、若者を巻きこんでいきたい。



福田市長のコメント

磯崎教授が、コーディネーターとして、フラットな立場として

やっていただいたことが成功のカギだったと思う。有識者会議も含めて、全員がフラットな立場で意見を述べ合うことで、委員の熱量が上がっていくことを実感した。

- 最後に、コーディネーターの磯崎教授より、感謝の言葉があり、閉会しました。

